
人魚姫物語（仮）

静琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫物語（仮）

【Nコード】

N6942T

【作者名】

静琉

【あらすじ】

昔々のおはなし『人魚姫』。恋した王子と結ばれず、泡になってしまった彼女。——しかし、彼女は生きていた。新しい恋と共に……。そんな彼女の子孫の話。

「魔女と彼女の望み」

彼女が彼と出会ったのは、冷たい風が肌を撫でる船の上。
はらはら、と彼女は静かに泣き続ける。手には小さな宝石が散り
填められた短剣が大事そうに握られていた。

（私……、私には出来ない……）

彼女には呪いが掛かっている。

『お前に”足”をあげる代わりに、その美しい声を頂くよ』

脳裏に木霊する魔女の言葉。彼女は思い出す、どうしてこうなっ
てしまったのか、を。

彼女は海の世界を統べる王の娘だった。海の中で生活し、魚の尾
を持つ者。それを『人魚』と称した。

そしてもうひとつの陸の世界。見たこともない陸の世界に、彼女
はいつも憧れていた。

語り部が語る陸の世界。それはまるで夢物語。

そして、彼女の憧れた世界。そこで彼女は”恋”をした。

「なりません！姫様っ！！」

引き留める声に罪悪感を感じつつも彼女は決して戻りはしなかった。

（ごめんなさい。でも私は……）

彼女が恋した相手は陸の世界の王子様。けれど自分は海の世界の者。種族が違う。住む世界が違う。

彼女は彼と同じ世界に住みたかった。彼の、隣で。彼と、一緒に。だから。

彼女は海の魔女の所へ行つたのだ。

「……ここがヴィロム・マーレイの洞窟」

噂に聞く海の魔女の住処。

ほの暗いその洞窟はまるで地獄の入り口のように思えて、彼女は微かに体を震わせた。

（どうしよう、怖い……）

噂に聞く魔女はとても恐ろしいと言う。悪逆非道、冷酷非情……その他諸々。噂でしか聞いたことのない魔女は彼女にとって、それは恐ろしいものだった。

「でも、実際会ってみなきゃ分からないですよね……」

半ば自分に言い聞かせるように呟く。覚悟を決め、彼女は洞窟に向き合う。

「……いい加減、そこどいてくれないかい？」
「きゃあああああー……ッ!!」

いざ進もうとした瞬間、後ろから声を掛けられた。思わず悲鳴を上げてしまう。

「煩い！」
「いたっ!？」

ばしん、と頭を容赦なく叩かれた。結構、痛かった。

涙目になりつつ後ろを振り返れば深緑の長い髪を持つ女性が居た。

「全く、入り口であーだこーだやってるからなんだと思って見てたけど……」

はあ、と女性は額に手を宛てて、溜め息を吐く。

「結局入らないんじゃ、商売の邪魔だよ」

「商、売……?」

「? なんだい、知っててここに来たんじゃないのかい？」

「貴女がヴィロム・マーレイですか？」

彼女の問い掛けに目の前の女性は目を見開き、驚いた様子だ。

「こりや笑えるねえ。アンタ、ホントに知らないで来たみたいだ。なら、何をしにここに来たんだい」

「あの……」「あー、ちょっと待った待った。なんか話し長くなりそうだし……」

中入りなよ、と女性は中へ促した。

「はいよ」

「あ、ありがとうございます」

差し出されたお茶を受け取る。それに恐る恐る口を付けた。美味しい。

「さて、自己紹介が遅れたね。アタシはヴィロム・マーレイ」

魔女つてやつさ、とヴィロムはあつけらかんと言いつつ。そんなヴィロムに彼女は、はあ。と気のない返事を零してしまう。

「なんだい、その気のない返事は。アタシが嘘付いてるように見えるかい？」

「いえ……その、あまりにも噂に聞いていた方と随分違うような気がしまして……」

なんだか気が抜けてしまいました。と彼女が言つとヴィロムは一瞬固まった後、急にあはははっ！！と笑い出す。

「アンタ、『あの』噂を聞いてここにきたのかい！！これで、入り口でうろつろしてたワケが分かったよ」

あーすっかりした、と告げるヴィロムに、今度は彼女が首を傾げる。あの、とはどの、噂なのだろうか。

「あの……」

「アンタの聞いてきた噂ってのは、アタシが『冷酷非情』で『悪逆非道』ってのじゃないのかい？」

そうです、とも違います、とも言えず、彼女は言葉に詰まってしまふ。

それを肯定ととったヴィロムは口角を吊り上げ、妖艶に微笑んだ。がらり、とヴィロムの纏っていた雰囲気が変わる。　ヴィロムの雰囲気飲まれ、彼女は息を詰めた。

「南の海の魔女、ヴィロム・マーレイ。我、汝に問う。望みは何か」「わ、私の望みは人間に！　私にひとの足を下さい！！」

ヴィロムの気に飲まれないよう、彼女は声を張り上げる。

「望みを叶えよう——……但し、代償は付く。お前は足を得る代わりに、その声を失うだろう……それでも？」

「——はい。お願い、します」

彼女は一瞬迷うように自分の足（とは言っても魚のヒレだが）を一瞥し、ヴィロムを真っ直ぐな眼差しで見返した。

覚悟を決めている。それは彼女自身が決断した確固たる意識。

「決意は本物のようだね。分かったよ、ここに手を出しな」

「……？」

「取って食いやしないよ」

さあ、早く。とヴィロムに促され、彼女は恐る恐る手を差し出した。

彼女の手を挟むように上に手を重ねる。

「我が声を聞き我が魔力を感じよ。我、汝の力もて、ここに契約を……」

彼女が理解出来たのはここまでだった。続いてヴィロムから発せられた言葉は聞いたこともない言葉。

それはヴィロムだけが知る秘められた言葉なのだろうか。

（大丈夫……）

彼女はそつと目を閉じた。不思議と恐怖はない。それは、重ねられたヴィロムの手が至極暖かったから、かもしれない。

不安がないと言えば嘘になる。けれど、信頼出来る。彼女はヴィロムのことをそう思った。

（ああ、でも……）

ヴィロムに自分の名前を覚えておけば良かった。

自分の口で、声で。それが出来なくなってしまったのは少し悲しいと、彼女は思った――……。

瞼の裏からでも光が収束していくのが分かった。

「——もういいよ、目を開けな」

ヴィロムの声に彼女はゆっくりと瞳を開いた。ヴィロムの緋色の瞳と目が合う。

成功……したのだろう。だけど、ヴィロムの顔はなんだか浮かないように思えた。

「……………」

どうしたんですか、と聞こうとした。だが、それは叶わなかった。ただ、口だけが言葉の形を取る。

「無駄だよ。もう契約は果たされた。一度陸に上がり、完全に乾いてしまえばお前の足はひとの足へと変わるだろう」

ヴィロムとの契約。

彼女の望み。

それが目の前に、形として叶ったのだ。

諦めかけて、けれど諦めきれなかった彼女の願い。

ヴィロムに感謝してもしきれない。この想いはどうやったら伝わるのだろうか。

「……………っ！！」

「ちょっ……………！？」

とりあえず、抱きついてみた。

耳元でヴィロムが驚きに息を飲んだのが分かったが、声が出せないのだ、これ位の表現許して欲しい。

「……喜ぶのはまだ早いんだ……」

彼女の体をヴィロムが押し返す。肩に手を掛け、俯くヴィロムは会った時のような自信に満ち溢れていた面影はない。

「アンタの…体は、泡となって消えてしまう……。1ヶ月、だ。それまでにアンタが好きだって思っている男に想われな、じゃないと……」

じゃないと、泡になって消えてしまう。とヴィロムは小さな声で言った。

悲しい、とでも言うように。

ああ……、そうか。だからヴィロムはあんな顔をしたんだ。私を……心配してくれている。まだ会って間もない私のコトを。

『気にしないで下さい』

口の動きだけでなんとか伝えようとする。ゆっくり、と紡げば分かるだろうか。

「でもっ……!!」

『貴方に逢えたから、私は諦めなくてよくなった。ちゃんと想いも伝えられる』

それで例え、想いが伝わらなくても、届かなくても。彼と同じ舞

台に立てるのなら、後は、私次第だから。

『ありがとうございます』

深く頭を下げる彼女に、ヴィロムの表情は見えなかった。けれど、それでいい。だって、私は少しの後悔もしていない。だからヴィロムのそんな顔は見たくない。

『私、ヴィロムさんに幸せだって伝えます。こうやって会いに来たりは出来ないけど……絶対！約束です！』

顔を上げて、右手の小指をヴィロムに向かって差し出す。

？ を浮かべ、困惑した様子のヴィロムの右手を取って、己のそれと絡めた。いつだったか聞かせて貰った『ヒトの約束』の仕方。誰かにこうやってするのは初めてだ。

『約束です。もし、私が約束を破ったら、ハリセンボン飲みます』

「ハリセンボンって……そりゃ、痛そうだね」

『そうでしょう？ 私も痛いのは嫌だから、絶対に破ったりしないわ』

につこり、と笑って返す。ヴィロムは呆れた様に表情を崩して、笑った。

それが、彼女たちが交わした約束。果たされなかった、約束。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6942t/>

人魚姫物語（仮）

2011年8月6日15時39分発行